

日蘭関係の史料と史蹟を求めて

大森, 実 / OMORI, Minoru

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

33

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1981-03-23

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010979>

日蘭関係の史料と史蹟を求めて

——オランダ留学の記——

大 森 實

わたくしは、昭和五十四年度法政大学在外研究員として、本年三月末までの一年間をオランダに滞在して、蘭学・日蘭交渉史に関する史料を主な対象とし、さらにこれらの背景ともいふべきオランダの学界やオランダ東インド会社 V. O. C. などに関する情報を調査あるいは入手することに努めた。

またできるかぎりオランダ・ベルギー両国内を旅行して、その歴史と現状を知るように試みた。ベルギーは一八一五年のウィーン会議の結果オランダに併合されたが、一八三〇年独立運動が起こり同年十月に独立を宣言した。しかしベルギー国内には二つの言語、二つの人種が存在しており、その一つがゲルマン系のフランク人でフランク語を使っており、他はラテン系のワロン人でフランス語を使う。そしてフランク語はオランダの一つの方言であった。こうした歴史的・文化的な事情からオランダとベルギー特にその北部はオランダと因縁が深い。例えば將軍吉宗の時代に野呂元丈が「阿蘭陀本草和解」として訳した蘭語原本の“Cruydt Boeck”は、ドドネウス R. Dodoneus によってフランク語で書

日蘭関係の史料と史蹟を求めて (大森)

かれアントウェルペン Antwerpen で出版されたのであって、その蘭訳本が船載されて老中に一六五九年献上されたのであった。また同じようにオランダの科学者として有名なツモン・ステフィン Simon Stevin はブリュージュ Brugge の出身であらう。現在収集した資料はじゅうぶんに整理されていないが、つたないながら見聞の一端を記して参考に供したい。

私の研究活動はおもにデン・ハーフ Den Haag (正式には、Gravenhage) とライデン Leiden で行なわれたので、まずデン・ハーフから始めることにしよう。

デン・ハーフはオランダの実質上の首都で、また国際政治の中心でもあり、市内各地に緑の多い公園やバラ公園があって市全体が美しい景観をもっている。アメリカの富豪カーネギーの寄贈を基に一九一三年完成の国際司法裁判所をはじめとして、十三世紀に建築された騎士の館のある国会、オランダ西印度会社に関係したナッツウ家のマウリッツ公の十七世紀に建てられた邸宅(マウリッツ・ハイス、現在は美術館)など歴史家の興味をそそる建築

物・銅像その他が多数ある。そして何といつても関心が向けられるのが国立総合文書館 *Algemeen Rijksarchief* である。

四月下旬の一日、ブライエンブルフ *Bleyenburg* の通りに面する文書館を訪れて旧知のファン・オプスタル博士 *Dr. Van Opstall* に面会し、文書収納庫へ案内され、オランダ東インド会社 *V. O. C.* 関係文書を一覽したのも日本・台湾・インドネシヤの各部門から重要な文書をひきだして説明を受け、文書閲読室・参考図書室を一巡してから館長ほか関係者に紹介されたが、この日の印象はいまだに薄れていない。

この文書館はネオ・ゴチック様式の建築物で一九〇二年以来、使われており、内部は薄暗いが、文書閲読室は二つの壁面がガラス張りです室内は明るいにもかかわらず机が五十に満たず、そのため九時少し過ぎに入室すると座席がなく止むを得ず帰宅することが何度かあった。

そして新館移転後は時代によっては原史料を閲覽できなくなる由を聞いたので可能な限り日蘭交渉史関係の文書を閲読するよう心がけた。十一月から本年一月上旬までは移転業務にあてられ、一月中旬から新文書館が公開された。新文書館はデン・ハーフ中央駅の隣接地にあり、白壁が映える近代建築物で、系譜学センター *Centraal Bureau voor Genealogie* などとも移転して併置されている。文書閲読室も面積・設備ともにひじょうに改善された。因みに明るい室内には一七三席の閲読机があり、文書請求をした研究者は机上のランプが点滅することにより、文書が出納所に届いたことを知らされる。

研究の主要テーマであった注文帳 *Eisch Boeck* については一七二五年以降幕末までの分を通読することができ、一部は筆写したが大部分はマイクロフィルムにより収集した。注文帳は江戸時代の日本人の西洋文明に対する関心と要求の具体相を示しており、ひじょうに興味深いものである。縦約三十一センチメートル、横約二十一センチメートルの、和紙をとじた帳面で、和蘭通詞たちが毛筆で蘭文を書いている。ぶつう表紙には、例えば *Keijzerlijk Eischen van 't Jaar voor Aanstaande A.O. 1786* とか *De Eijsch van Zijn Keijzerlijk Majesteit voor 't Aanstaande A.O. 1810* と記され、また「年番譯詞」の朱の丸印が捺されており、なかにはさらに同じ朱印が割って捺されている帳面もある。注文者は將軍だけではなく、長崎奉行・長崎代官・長崎会所調役・長崎町年寄・和蘭通詞の氏名が明記されている。さらに年代が下ると、老中・有力大名もあらわれる。

注文帳を閲覽請求すると、その注文帳が入っている一包みの文書束が手渡されたので、前記の表題の帳面だけではなく、*Appart Eijsch van Zijn Keijzerlijk Majesteit voor 't Aanstaande A.O. 1810*, *Notitie der Koopmanschappen In 't Aanstaande A.O. 1810*, *Notitie der Cambang Goederen voor 't Aanstaande A.O. 1818* などの各種の文書を読むことができたことは幸運であった。注文については、馬・鳥・物品(時計やテーブル・サービス)の彩色の絵を、また布類では布地見本をそえているものがあつた。

ところで注文品がすべて舶載されたとは限らない。その実情は輸入物品を記しているオランダ人の記録によって知ることができ

るが、その史料は一六二一年以後分が保存されている。また東インド会社からの將軍その他に対する献上品のリストも一六三三年以後の分があり、これらについても相当教閲し、この他にも出島商館在住のオランダ人の注文書、砲術関係史料その他を採集することができた。しかし長年月を経ているためいちじるしく損傷した史料もあり、請求をしたものの「Slecht Staat」と請求書に記入されて返され、閲覽できなかった史料もいくつかあった。

文書館に集まる東アジア関係の研究者が毎週水曜日に昼食をともにしているが、私も何度か出席し、また閲読室で知人となったりしてオランダはもちろんスリランカ・台湾・タイ・インドネシアからの研究者を知己とすることができたことは望外の喜びであった。

また文書借覧中でも館外へすることは自由であったから、しばしば外出して古書店や美術品店をのぞいたり、やや遠出してハーグの森を散策して疲れをいやしたこともあった。この森にある「森の王宮」には文久遣欧使節一行が招かれ歓待されたというが、水と緑の美しい公園である。

ライデン Leiden は、博物館都市と言われ、国立民俗学博物館 Rijksmuseum voor Volkenkunde ・ 自然科学史博物館 Museum voor Geschiednis van Natuurwetenschappen ・ 古代史博物館 Museum van Oudheden ・ 博物学博物館 Museum van Natuurlijke Historie ・ 風車博物館 Molennuseum “De Valk” などの多くの博物館があり、またオランダ最古のライデン大学がある。この大学は、一五七四年に長期間にわたる籠城に耐えスペイン軍

日蘭関係の史料と史蹟を求めて（大森）



ライデンのラーベンプルフ街にあるシーボルトの旧宅

の攻撃を防いだライデン市民に対してウイリアム公が寄贈したもので、公が永代免租と大学のどちらかを、と言ったのに対し市民は大学を選んだというエピソードがある。昨年創立四百五周年記念式典が催され、私も来賓として招待される光栄に浴した。

ライデン大学は大きなキャンパスをもたず、また新旧さまざまな建物を使用している。例えば駅前のモダンなビルもその一部であるが、法学部の校舎は旧牢獄である。そして関係施設はほとんどがラーペンブルフ街とその付近に集中している。しかし大学は目下市街西側のウィッテ運河に沿った土地に大きな新校舎を建設中であるから、近い将来多くの大学施設がそこに集められることであろう。

ライデンへの訪問者は、市役所前を走るブレー通りや商店街のハーレム通りとあわせてラーペンブルフ街の名を記憶するであろう。ライデン市の中でもっとも美しいと言われているこの街区は、同名の運河をはさんでL字形の街並みを示している。またこの街並みは古くから学者・文人たちが居を構えたことで有名であった、デカルトをはじめとして江戸時代の日本医学思想に大きな影響を与えライデン大学長であったブルーハーヴェ H. Boerhave やシーボルト Ph. Fr. von Siebold などの住居が、いまも使われている。シーボルトは、その住居の一部に日本から持帰った物品を公開展示したが、これがオランダにおける民俗学博物館のさきがけとなった。このラーペンブルフの街並みがつきてドゥッザ通りに連なろうかとする一角に、有名な物理学者カメリン・オンネスの名を冠した研究所を斜め右前方に望みながら、ライデン大

学日本学韓国学センター Centrum voor Japanologie en Koreanistik がある。同センターはライデン大学付属の研究施設であるが、また教育施設でもあって同大学日本学科の授業が行なわれている。そして初代所長は、シーボルトの門弟でありライデン大学にヨーロッパ最初の日本学科を創設した Hoffman J. J. Hoffman であり、現所長フォス博士 Prof. Dr. F. Vos は第四代である。同センターには日本学関係図書が史料・参考文献とも和洋にわたって相当数所蔵されているので研究上の便宜を得ることが多い。同センターに所蔵されている古和書一五二部については許可をえて詳しく調査したが、これらの和書はシーボルト、フィッセル、ヘールツその他がオランダへもたらしたものである。

国立腊葉館 Rijksherbarium は、日本学センターから徒歩約三分、ウィッテ運河とフリート川とを連結する水路にそうスヘルペン・カード街にある。腊葉はおし葉の意であるが、同館は植物学研究所としての機能を果しており、所蔵する腊葉標本の数は三百万枚をこすと言われ世界第五位を誇っている。七月下旬から八月中旬までの三週間、本学講師石山禎一氏と私が調査したのち、九月、十一月のはぼ二カ月、連日同館で単独で調査を続け、日本の学界には未知の多くの資料を発見することができた。書庫内の二つの読書机の一つを終日私が使用し続けたために、多くの研究員に迷惑がかかったことは言うまでもない。まして私は正式に招かれた人間ではなかった。それにもかかわらず調査を可能にしたものは、館長カルクマン博士 Prof. Dr. C. Kalkman、研究員フィント博士 Dr. W. Vink やこの図書館のフォーレンザンク Mr.

Vogelzang ルット Mr. Lut 両氏たちの暖い好意であった。異国でうける好意はことさらに身にしみるものである。そして十一月末のころ、腊葉館を辞して疲れた身を駅へ運ぶとき、ふと振りかえって見る腊葉館の建物が、まだ午後四時だというのにもう陽はおちてはの暗いなかに静かなただずまいを見せ、ラーペンブルフの運河ぞいの葉がおちつくした街路樹の列のなかに点在しているガス燈形の街路灯があわい光をあたりになげかけていた。

新発見の資料とはなにか。それはシーボルトとその後継者ビュルゲルの自筆の書簡を含む関係文書、シーボルト収集の、また門人伊藤圭介・平井海蔵その他が収集しシーボルトに献呈した腊葉標本と和書、樹木標本、明治初期のお雇い外人教師で「日本薬局方」を起草するなどして日本薬学の基礎をきざしたヘールツ収集の和書（腊葉館の一部ではこれをシーボルト収集と信じていた）などであって、ヘールツはシーボルトの日本研究に触発されて来日し、伊藤や京都の明石博高などと親交があった。これらの人びとは日本近代化の貢献者の系譜に名を連ねている。

これまで、高野長英その他の門人が提出したオランダ語論文がシーボルトの大著『Nippon』にどう貢献したかは、緒方富雄、その他の諸先学によって明らかにされているが、これに対して伊藤・平井らにより献じられた腊葉標本などは、シーボルトの日本植物研究に対するこれらの貢献を明らかにするであろう。これは僅か一例にすぎないが、この他にも多くの興味ある研究課題を見いだすことができる。調査に大きい便宜を与えてくれた腊葉館に対して、私は新発見の和文古文書のローマ字式解説と英訳を提供

し、また同館所蔵のヘールツ旧蔵書販売目録を訂正するなど若干の寄手をおこないつつ、入手した同日録や『Catalogus Musaei Botanici Lugduno Batavi』などによって調査を続けた結果、関係史料を日蘭両国でさらに博搜する必要性、シーボルトやヘールツ収集の和書について日本学センター・腊葉館・ライデン大図書館・民俗学博物館を総合的に調査する必要をさとした。この事は地図についても同様である。

またシーボルトの業績の意義をいっそう明らかにするために、かれ自身はもちろん、日本国内の門人との関係さらにオランダ側の研究者すなわちビュルゲル Bürger、テミンク Temmink、ブルーム Brume、ミクエル Miguel などの意義を考えなければならぬ。そしてこのことは一面において日本博物学の西欧の学界に対する寄手を解明することに通じている。さらに呉秀三博士が早くから指摘しているシーボルトの日本開国への貢献という政治活動についても、最近オランダではマックリーン博士 Dr. Mac Lean が論じているが、総合文書館で調査した結果、日本開国を望む欧米諸国の政策にからむシーボルトの書簡がかなり植民省文書に含まれていることが解った。

ライデン大学本部はラーペンブルフ運河のほぼなかほどにあり、十六世紀建立という旧尼僧修道院の建物のなかには新任教授たちの就任講演その他の公式行事が行なわれる広間や歴代の教授の油絵肖像画が壁面いっぱいにかかげられている評議員室などがあるが、四百年以上の歴史を語る大学史博物館 Academisch Historisch Museum は小室ながら興味をひく史料を展示してお

り、隣接の付属植物園 *Hortus Botanicus* の景観と史的調査対象となる植物などと同様に一度は足をはこび見るべき所である。

大学本部正面から出てノンネン橋を渡り右折して約六十メートルで大学図書館がある。ここでは日本で稀観書に属する洋書をかたり見ることができたが、また多数の和書と日本関係の地図が所蔵されている。和書はセルリエの分類により整理されている。この図書館で興味をひかれたのは図書検索カードで、古い年代の分は大福帳式のノートに記されていることであつた。

ライデン駅に近い民俗学博物館には日本室があつて江戸期の物品を展示しているが、収蔵庫にあるシーボルト収集品の多種・多量さにはただ驚くほかはなく、またかれ以外の人物収集の和書もある。日本室の展示室総面積に占める割合は小さく、インドネシアを含む東南アジア部門の方がはるかに大きな比重を持っている。また日本部門担当研究員は、主任のファン・フリック氏 *Mr. Van Gulik* と助手一名のみで、手不足の感をまぬかれなかつた。

民俗学博物館とならんで自然科学史博物館 *Museum voor Geschiedenis van Natuurwetenschappen* がある。こゝには、オランダの自然科学の歴史を語る史料や科学器械が豊富に所蔵展示されているが、黄金時代という十七世紀の自然科学者、特にホイヘンス *Ch. Huygens* に関するものが多い。蘭学に関する問題を調査するために私も何度か足を運んだが、蘭学は自然科学や技術を主な内容としているため同館で販売している出版物は蘭学史研究の良し参考となるものがあり、*ミッセンブルック* *Muschenbroek* やオランダの衡の変遷に関する研究書を入手することがで

きた。また蘭学の背景となるオランダ科学・技術の当時の状況を知るためにも、同館に注目しなければならぬことは当然である。なお、ホイヘンスについてはデン・ハーフの近郊フオアブルフ *Voorburg* にあるホイヘンス家の旧邸ホッフワイク *Hofwijk* を一度は訪ねるのがよい。

アムステルダムには、国立博物館 *Rijksmuseum* の日本部門の平戸出身のコレネリア一家を描いた油絵や出島の模型など、その他にも記すべきことは多いが、比較的よく知られているからここでは除き、日蘭交渉史の観点から因縁のあるほかの地方都市について記すことにしよう。

よく人はオランダには山・坂がないというが、大部分の観光客が訪れるオランダ西部の北ホランド・南ホランド両州に限れば、この印象は適切である。しかしオランダ東部のツヴォレ *Zwolle* からアペルドールン *Apeldoorn* を経てアーネム *Arnhem* に至る地域は、広大な森林丘陵地帯であり、また最南端のリンブルフ州は全体が丘陵地帯であつて、六月から十月にかけてのドライブは、これらの地方の森林美を満喫させてくれる。

アーネムからライン河を渡って少し南の地点にあるネイメーヘン *Nijmegen* は、ライデンと結ぶライン河の線によって紀元二世紀にローマ帝国領の北限線を形成した都市である。ワール河ぞいの丘には西暦七九九年建設のカロリング王朝期のチャペルが八角形のその姿を遺し、市中の古くて美しい計量所とともにその長い歴史を物語っているようである。リンブルフ州のヘーレン *Heerlen* には、近年帝政ローマ時代の浴場跡が発見された。遺跡

保存のために設けられた巨大な覆の建物内の架橋のうえに立って録音テープの説明を聞きながら温湯槽・微温湯槽・冷水槽などその全貌を見ることが出来る。ここからはかに北上してデヴェンター Deventer を訪れよう。アイセル河にのぞむこの都市は、中世・ルネッサンス期を通じて政治・経済・文化・宗教の中心地の一つであったが、大教会をはじめ史蹟に富み史都と呼ぶのにふさわしい。デカルトは一六三二―三三年この地に住んだが、この一事によってもその知的雰囲気を想像することができる。またここで鑄造された貨幣は、バルト海沿岸の各地やはるか遠くソ連においても発見されるという。ハンザ同盟の建物がいままも「Hanze School」という名のもとに校舎として使われている。そしてさらに私が親しみを覚えたのは、この地が長崎出島のオランダ商館に医師として勤務したテン・ライネ ten Rijnse の生誕地である故であろう。私は三度ここを訪れたが、いつも史蹟や古い建築物さらに博物館をゆっくり巡り、石畳の坂道を登り降りしながら鎌倉とデヴェンターを比べ日欧の文化について考えるなどして自由な時間をすごした。

デヴェンターより北の地方にはゆっくり滞在することはなく、列車・バスを乗り継いでフローニンゲン Groningen、レイワールデン Leewarden、デン・エフェル den Over などを通じたのみであったが、時は八月、アッセン Assen やフローニンゲンの農業と野づらの風景や咲き誇る花に、南部とはかなり異なる気候・風土を知った。とくに印象深かったのは北海とザイデル海とを区切る、全長三〇 km、幅九〇 m の大堤防を通ったことで、一

日蘭関係の史料と史蹟を求めて（大森）



デヴェンターのハンザ・スクール

九一九年に着工し完成したのは一九三二年である。二つの海を区切る意図は遠く一七世紀に始まるというが、「神は世界を作り、オランダ人はオランダを作った」「水はオランダ人の友であり敵である」と言われるとおり、そこに干拓事業の真髄とオランダ人の忍耐力の強さを見る思いであった。

北ホランド・南ホランド・ゼーランドの三州には、東インド会社の東洋貿易によってよく栄えた都市がいくつもある。それらの都市はどれも一七世紀の建物を多く持っていて、路面の石だたみとともに往時の賑わいをほうふつとさせる。エンクハイゼン Enkhuizen に残るペパーハイス Peppenhuis (胡椒倉庫)も印象にのこっているが、ホールン Hoorn に行くくと海事の国オランダの印象がいっそう強く焼きつけられる。一四世紀に発展しはじめ一七世紀に最盛期をむかえたこの都市は、南米大陸の先端をヨーロッパ人として始めて航海したスハウテン W. Schouten やバタフィア建設者として名高い東インド総督ターン J. P. Coen の出身地である。ターンはオランダ海事発展の象徴的人物であろう。市の計量所前の広場にあるターンの銅像。港の岸壁にあつて出船入船を送り迎えるかのような三人の人物の銅像。岸壁の側にそびえ東洋貿易の活況を見守った塔。どれもがこの市のシムボルである。やや南下してアムステルダムに近くザーンダム Zaanendam には、造船術を習得するためにその身分を隠したというロシヤのピョートル大帝の住居が遺されているが、人は小さい木札によってそれを知るのみである。その家は茶褐色のレンガを積みあげた、屋根裏をふくめて三階建のものである。

ハーレム Haarlem は一〇世紀から栄え始め文化・宗教の中心であった都市であるが、いまでもその地位はゆるがない。街並みは中世風の雰囲気を持ち、歴史的関心からは特にフロート・マルクト広場の景観がすばらしい。後期ゴチック様式の聖バヴオ教会や市役所などが広場をかこんで偉容をほこっている。商業都市アムステルダムに近いこの地には富裕な商人も多かったが、一七世紀にはハルス F. Hals、ライスダール J. van Ruyssael を筆頭とする一群の画家が輩出した。また聖バヴオ教会の大オルガンは、オルガンがよく普及しているオランダでも特に有名で、かつてモーツァルトやハイドンも演奏したことがある。またここには一七五二年に民間の有志によってオランダ自然科学協会が設立され現在も活動している。これは同種の団体のうちもっとも古いものの一つである。他のヨーロッパ諸国では、例えばロイヤル・イんステイテシヨン Royal Institution のように王や皇帝の影響のもとで同種の組織が創設されたのに反し、オランダでは民間人によっていることが著しい特徴である。前記の協会の事務局はテイラーズ博物館 Teylers Museum にあるが、同館には一七一九世紀の自然科学の発達をもの語る史料や器具の豊かなコレクションが所蔵されている。私もここを訪れてオランダ科学史の史料を質したが、二度とも親切な応対をうけ、例えば一八一〇年にすでに日本植物が栽培されたことを知った。これはシーボルトのそれより二〇年もはやく注目すべきことである。またオランダが誇る自然科学者ファンマルム M. van Marum の生涯と業績に関する研究論文集五巻を入手することができた。

日蘭関係の史料と史蹟を求めて（大森）

この他にも、わたくしは南オランダ州の、前記したデン・ハーフ、ライデン以外のデルフト Delft、ハウダ Gorda、ロッテルダム Rotterdam、ドルドレヒト Dordrecht、ユトレヒト Utrecht 州を中心で二千年の歴史をもつユトレヒト Utrecht、そしてゼーランド州のミッデルブルフ Middelburg とフリッシンゲン Vlissingenを訪れたが、ベルギーとあわせて今回は割愛しよう。

なお、「研修報告集」第一号（昭和五十六年三月）、雑誌「法政」昭和五十五年十月号、「法政大学教養部紀要」第三十七号人文篇にそれぞれ関連記事があるので参照していただきたい。また、このつたない報文から諸者が何か得られることがあれば、わたしの望外の喜びである。

（一九八〇・一二 成稿）



南オランダの風景 右側の小さい建物の中で日本風の茶会が行なわれる。